竜

芥川龍之介

一

宇治(うじ)の大納言隆国(だいなごんたかくに)「やれ、やれ、昼寝の夢が覚めて見れば、今日はまた一段と暑いようじゃ。あの松(まつ)ケ枝(え)の藤(ふじ)の花さえ、ゆさりとさせるほどの風も吹かぬ。いつもは涼しゅう聞える泉の音も、どうやら油蟬の声にまぎれて、反(かえ)って暑苦しゅうなってしもうた。どれ、また童部(わらんべ)たちに煽(あお)いででも貰おうか。

「何、往来のものどもが集った？　ではそちらへ参ると致そう。童部(わらんべ)たちもその大団扇(おおうちわ)を忘れずに後からかついで参れ。

「やあ、皆のもの、予が隆国じゃ。大肌ぬぎの無礼は赦してくれい。

「さて今日はその方どもにちと頼みたい事があって、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのじゃ。と申すはこの頃ふとここへ参って、予も人並に双紙を一つ綴ろうと思い立ったが、つらつら独り考えて見れば、生憎予はこれと云うて、筆にするほどの話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝らすのも、予のような怠けものには、何より億劫千万じゃ。ついては今日から往来のその方どもに、今は昔の物語を一つずつ聞かせて貰うて、それを双紙に編みなそうと思う。さ

すれば内裏(だいり)の内外(うちそと)ばかりうろついて居(お)る予などには、思いもよらぬ逸事(いつじ)奇聞が、舟にも載せ車にも積むほど、四方から集って参るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶(かな)えてくれる訳には行くまいか。

「何、叶えてくれる？　それは重畳(ちょうじょう)、では早速一同の話を順々にこれで聞くと致そう。

「こりゃ童部(わらんべ)たち、一座へ風が通うように、その大団扇で煽(あお)いでくれい。それで少しは涼しくもなろうと申すものじゃ。鋳物師(いもじ)も陶器造(すえものつくり)も遠慮は入らぬ。二人ともずっとこの机のほとりへ参れ。鮓売(すしうり)の女も日が近くば、桶はその縁(えん)の隅へ置いたが好(よ)いぞ。わ法師も

金鼓（ごんく）を外（はず）したらどうじゃ。そこな侍も山伏も篁（たかむしろ）を敷いたろうな。

「よいか、支度が整うたら、まず第一に年かさな陶器造（すえものつくり）の翁（おきな）から、何なりとも話してくれい。」

二

翁（おきな）「これは、これは、御叮嚀な御挨拶（ごあいさつ）で、下賤（げせん）な私（わたくし）どもの申し上げます話を、一々双紙へ書いてやろうと仰有（おっしゃ）います――そればかりでも、私の身にとりまして、どのくらい恐多いかわかりません。が、御辞退

申しましては反って御意に逆う道理でございますから、御免を蒙って、一通り多曖もない昔話を申し上げると致しましょう。どうか御退屈でもしばらくの間、御耳を御借し下さいまし。

「私どものまだ年若な時分、奈良に蔵人得業恵印と申しまして、途方もなく鼻の大きい法師が一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思うくらい、年が年中恐しくまっ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに諢名をつけまして、鼻蔵――と申しますのは、元来大鼻の蔵人得業と呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると

申しますので、やがて誰云うとなく鼻蔵人（はなくろうど）と申し囃（はや）しました。が、しばらく致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻蔵鼻蔵と、謡（うた）われるようになったのでございます。現に私も一両度、その頃奈良の興福寺（こうふくじ）の寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻蔵とでも譏（そし）られそうな、世にも見事な赤鼻の天狗鼻（てんぐばな）でございました。その鼻蔵の、鼻蔵人の、大鼻の蔵人得業の恵印法師（えいんほうし）が、ある夜の事、弟子もつれずにただ一人そっと猿沢（さるさわ）の池のほとりへ参りまして、あの采女柳（うねめやなぎ）の前の 堤（つつみ）へ、『三月三日この池より竜昇らんずるなり』と筆太に書いた建札を、高々と一本打ちま

した。けれども恵印（えいん）は実の所、猿沢の池に竜などがほんとうに住んでいたかどうか、心得ていた訳ではございません。ましてその竜が三月三日に天上（てんじょう）すると申す事は、全く口から出まかせの法螺（ほら）なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確かだったのでございましょう。ではどうしてそんな入らざる真似を致したかと申しますと、恵印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑いものにするのが不平なので、今度こそこの鼻蔵人がうまく一番かついだ挙句（あげく）、さんざん笑い返してやろうと、こう云う魂胆（こんたん）で悪戯（いたずら）にとりかかったのでございます。

御前（ごぜん）などが御聞きになりましたら、さぞ笑止（しょうし）な事と思召しましょうが、何分今は昔の御話で、その頃はかような悪戯を致しますものが、とかくどこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如来様（にょらいさま）を拝みに参ります婆さんで、これが珠数（じゅず）をかけた手に竹杖をせっせとつき立てながら、まだ靄（もや）のかかっている池のほとりへ来かかりますと、昨日（きのう）までなかった建札が、采女柳の下に立って居ります。はて法会（ほうえ）の建札にしては妙な所に立っているなと不審には思ったのでございますが、何分文字が読めま

せんので、そのまま通りすぎようと致しました時、折よく向うから偏衫（へんさん）を着た法師が一人、通りかかったものでございますから、頼んで読んで貰いますと、何しろ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』で、――誰でもこれには驚いたでございましょう。その婆さんも呆気（あっけ）にとられて、曲った腰をのしながら、『この池に竜などが居りましょうかいな。』と、とぼんと法師の顔を見上げますと、法師は反って落ち着き払って、『昔、唐（から）のある学者が眉（まゆ）の上に瘤（こぶ）が出来て、痒（かゆ）うてたまらなんだ事があるが、ある日一天俄（にわか）に掻き曇って、雷雨車軸を流すがごとく降り注（そそ）いだと見てあれば、たちまち

その瘤がふっつと裂けて、中から一匹の黒竜が雲を捲いて一文字に昇天したと云う話もござる。瘤の中にさえ竜が居たなら、ましてこれほどの池の底には、何十匹となく蛟竜（こうりゅう）毒蛇が蟠（わだかま）って居ようも知れぬ道理（ことわり）じゃ。』と、説法したそうでございます。何しろ出家に妄語（もうご）はないと日頃から思いこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝（きも）を消しますまい事か、『成程そう承りますれば、どうやらあの辺の水の色が怪しいように見えますわいな。』で、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を独り後に残して、喘（あえ）ぎ喘ぎ念仏を申しながら、竹杖をつく間（ま）もまだるこしそうに急いで逃

げてしまいました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱えたかったのはこの法師で――これはそうでございましょう。実はあの発頭人の得業恵印、諢名は鼻蔵が、もう昨夜建てた高札にひっかかった鳥がありそうだくらいな、はなはだ怪しからん量見で、容子を見ながら、池のほとりを、歩いて居ったのでございますから。が、婆さんの行った後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴の下人に荷を負わせた虫の垂衣の女が一人、市女笠の下から建札を読んで居るのでございます。そこで恵印は大事をとって、一生懸命笑を嚙み殺しながら、自分も建札の前に立って一応読むようなふ

りをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議そうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺(こうふくじ)の方へ引返して参りました。

「すると興福寺の南大門(なんだいもん)の前で、思いがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居った恵門(えもん)と申す法師でございます。それが恵印(えいん)に出会いますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちょいとひそめて、『御坊(ごぼう)には珍しい早起きでござるな。これは天気が変るかも知れませぬぞ。』と申しますから、こちらは得たり賢しと鼻を一ぱいににやつきながら、『いかにも天気ぐらいは変るかも知れませぬて。聞けばあの猿沢の池から三

月三日には、竜が天上するとか申すではござらぬか。』と、したり顔に答えました。これを聞いた恵門は疑わしそうに、じろりと恵印の顔を睨めましたが、すぐに喉を鳴らしながらせせら笑って、『御坊は善い夢を見られたな。いやさ、竜の天上するなどと申す夢は吉兆じゃとか聞いた事がござる。』と、鉢の開いた頭を聳かせたまま、行きすぎようと致しましたが、恵印はまるで独り言のように、『はてさて、縁無き衆生は度し難しじゃ。』と、呟いた声でも聞えたのでございましょう。麻緒の足駄の歯を扭って、憎々しげにふり返りますと、まるで法論でもしかけそうな勢いで、『それとも

竜が天上すると申す、しかとした証拠がござるかな。』
と問い詰(つめ)るのでございます。そこで恵印はわざと悠々
と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、
『愚僧の申す事が疑わしければ、あの采女柳(うねめやなぎ)の前にあ
る高札(こうさつ)を読まれたがよろしゅうござろう。』と、見下(みくだ)す
ように答えました。これにはさすがに片意地な恵門も、
少しは鋒(ほこさき)を挫かれたのか、眩(まぶ)しそうな瞬(またた)きを一つ
すると、『ははあ、そのような高札(こうさつ)が建ちましたか。』
と気のない声で云い捨てながら、またてくてくと歩き
出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら
考えて行くらしいのでございます。その後姿を見送っ

た鼻蔵人の可笑しさは、大抵御推察が参りましょう。恵印はどうやら赤鼻の奥がむず痒いような心もちがして、しかつめらしく南大門の石段を上って行く中にも、思わず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさえ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札は、これほどの利き目がございましたから、まして一日二日と経って見ますと、奈良の町中どこへ行っても、この猿沢の池の竜の噂が出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの悪戯であろう。』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑の竜が天上致したなどと申す評判もございまし

たので、そう云うものさえ内心では半信半疑と申しましょうか、事によるとそんな大変があるかも知れないぐらいな気にはなって居ったのでございます。するとここにまた思いもよらない不思議が起ったと申しますのは、春日（かすが）の御社（おやしろ）に仕えて居りますある禰宜（ねぎ）の一人娘で、とって九つになりますのが、その後（のち）十日と経たない中に、ある夜母の膝を枕にしてうとうとと致して居りますと、天から一匹の黒竜が雲のように降って来て、『わしはいよいよ三月三日に天上する事になったが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算（つもり）だから、どうか安心していてくれい。』と人語を放って申しま

した。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれこうこうと母親に話しましたので、さては猿沢の池の竜が夢枕に立ったのだと、たちまちまたそれが町中の大評判になったではございませんか。こうなると話にも尾鰭がついて、やれあすこの稚児にも竜が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも竜が現れて託宣をしたのと、まるでその猿沢の池の竜が今にもあの水の上へ、首でも出しそうな騒ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に竜の正体を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さえ出て参りました。これは毎朝川魚を市へ売りに出ます老爺で、その日も

まだうす暗いのに猿沢の池へかかりますと、あの采女柳（うねめやなぎ）の枝垂（しだ）れたあたり、建札のある堤（つつみ）の下に漫々と湛えた夜明け前の水が、そこだけほんのりとうす明（あか）く見えたそうでございます。何分にも竜の噂がやかましい時分でございますから、『さては竜神（りゅうじん）の御出ましか。』と、嬉しいともつかず、恐しいともつかず、ただぶるぶる胴震（どうぶる）いをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそっと忍び寄ると、采女柳につかまって、透（す）かすように、池を窺いました。するとそのほの明（あか）い水の底に、黒金（くろがね）の鎖を巻いたような何とも知れない怪しい物が、じっと蟠（わだかま）って居りましたが、たち

まち人音（ひとおと）に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、見る見る池の面（おもて）に水脈（みお）が立って、怪しい物の姿はどこことも知れず消え失せてしまったそうでございます。が、これを見ました老爺（おやじ）は、やがて総身（そうしん）に汗をかいて、荷を下した所へ来て見ますと、いつの間にか鯉鮒（こいふな）合せて二十尾（び）もいた商売物（あきないもの）がなくなっていたそうでございますから、『大方劫（おおかたこう）を経た獺（かわおそ）にでも欺（だま）されたのであろう。』などと哂（わら）うものもございました。けれども中には『竜王が鎮護遊ばすあの池に獺の棲（す）もう筈もないから、それはきっと竜王が魚鱗（うろくず）の命を御憫（おあわれ）みになって、御自分のいらっしゃる池の中へ御召し寄せ

なすったのに相違ない。』と申すものも、思いのほか多かったようでございます。

「こちらは鼻蔵（はなくら）の恵印法師（えいんほうし）で、『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札が大評判になるにつけ、内々（ないない）あの大鼻をうごめかしては、にやにや笑って居りましたが、やがてその三月三日も四五日の中に迫って参りますと、驚いた事には摂津（せっつ）の国桜井（さくらい）にいる叔母の尼が、是非その竜の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上って参ったではございませんか。これには恵印も当惑して、嚇（おど）すやら、賺（すか）すやら、いろいろ手を尽して桜井へ帰って貰おうと致しましたが、

叔母は、『わしもこの年じゃで、竜王(りゅうおう)の御姿をたった一目拝みさえすれば、もう往生しても本望じゃ。』と、剛情にも腰を据えて、甥の申す事などには耳を借そうとも致しません。と申してあの建札は自分が悪戯(いたずら)に建てたのだとも、今更白状する訳には参りませんから、恵印もとうとう我(が)を折って、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、当日は一しょに竜神(りゅうじん)の天上する所を見に行くと云う約束までもさせられました。さてこうなって考えますと、叔母の尼さえ竜の事を聞き伝えたのでございますから、大和(やまと)の国内は申すまでもなく、摂津の国、和泉(いずみ)の国、河内(かわち)の国

を始めとして、事によると播磨(はりま)の国、山城(やましろ)の国、近江(おうみ)の国、丹波(たんば)の国のあたりまでも、もうこの噂が一円(いちえん)にひろまっているのでございましょう。つまり奈良の老若(ろうにゃく)をかつごうと思ってした悪戯が、思いもよらず四方(よも)の国々で何万人とも知れない人間を瞞(だま)す事になってしまったのでございます。恵印はそう思いますと、可笑(おか)しいよりは何となく空恐しい気が先に立って、朝夕(あさゆう)叔母の尼の案内がてら、つれ立って奈良の寺々を見物して歩いて居ります間も、とんと検非違使(けびいし)の眼を偸(ぬす)んで、身を隠している罪人のような後(うしろ)めたい思いがして居りました。が、時々往来のものの話などで、

あの建札へこの頃は香花（こうげ）が手向（たむ）けてあると云う噂を聞く事でもございますと、やはり気味の悪い一方では、一（ひと）かど大手柄でも建てたような嬉しい気が致すのでございます。

「その内に追い追い日数（ひかず）が経って、とうとう竜の天上する三月三日になってしまいました。そこで恵印は約束の手前、今更ほかに致し方もございませんから、渋々叔母の尼の伴（とも）をして、猿沢（さるさわ）の池が一目に見えるあの興福寺（こうふくじ）の南大門（なんだいもん）の石段の上へ参りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡って、門の風鐸（ふうたく）を鳴らすほどの風さえ吹く気色（けしき）はございませんでしたが、それでも

今日（きょう）と云う今日を待ち兼ねていた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、摂津、播磨、山城、近江、丹波の国々からも押し寄せて参ったのでございましょう。石段の上に立って眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それがまた末はほのぼのと霞をかけた二条の大路（おおじ）のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子（えぼし）の波をざわめかせて居るのでございます。と思うとそのところどころには、青糸毛（あおいとげ）だの、赤糸毛（あかいとげ）だの、あるいはまた梅檀庇（せんだんびさし）だのの数寄（すき）を凝らした牛車（ぎっしゃ）が、のっしりとあたりの人波を抑えて、屋形（やかた）に打った金銀の金具（かなぐ）を折からうららかな春の日ざしに、眩（まば）ゆくきら

めかせて居りました。そのほか、日傘をかざすもの、平張を空に張り渡すもの、あるいはまた仰々しく桟敷を路に連ねるもの——まるで目の下の池のまわりは時ならない加茂の祭でも渡りそうな景色でございます。これを見た恵印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これほどの大騒ぎが始まろうとは夢にも思わずに居りましたから、さも呆れ返ったように叔母の尼の方をふり向きますと、『いやはや、飛んでもない人出でござるな。』と情けない声で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元気も出ないと見えて、そのまま南大門の柱の根がたへ意気地なく蹲ってしまい

ました。

「けれども元より叔母の尼には、恵印のそんな腹の底が呑みこめる訳もございませんから、こちらは頭巾(ずきん)もずり落ちるほど一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程竜神の御棲(おす)まいになる池の景色は格別だの、これほどの人出がした上からは、きっと竜神も御姿を御現わしなさるだろうのと、何かと恵印をつかまえては話しかけるのでございます。そこでこちらも柱の根がたに坐ってばかりは居られませんので、嫌々腰を擡(もた)げて見ますと、ここにも揉烏帽子(もみえぼし)や侍烏帽子(さむらいえぼし)が人山(ひとやま)を築いて居りましたが、その中に交っ

てあの恵門法師も、相不変鉢の開いた頭を一きわ高く聳やかせながら、鵜の目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。恵印は急に今までの情けない気もちも忘れてしまって、ただこの男さえかついでやったと云う可笑しさに独り擽られながら、『御坊』と一つ声をかけて、それから『御坊も竜の天上を御覧かな。』とからかうように申しましたが、恵門は横柄にふりかえると、思いのほか真面目な顔で、『さようでござる。御同様大分待ち遠い思いをしますな。』と、例のげじげじ眉も動かさずに答えるのでございます。これはちと薬が利きすぎた――と思うと、浮いた声も自然に出な

くなってしまいましたから、恵印はまた元の通り世にも心細そうな顔をして、ぼんやり人の海の向うにある猿沢の池を見下しました。が、池はもう温んだらしい底光りのする水の面に、堤をめぐった桜や柳を鮮にじっと映したまま、いつになっても竜などを天上させる気色もございません。殊にそのまわりの何里四方が、隙き間もなく見物の人数で埋まってでもいるせいか、今日は池の広さが日頃より一層狭く見えるようで、第一ここに竜が居ると云うそれがそもそも途方もない嘘のような気が致すのでございます。

「が、一時一時と時の移って行くのも知らないように、

見物は皆片唾（かたず）を飲んで、気長に竜の天上を待ちかまえて居るのでございましょう。門の下の人の海は益（ますます）広がって行くばかりで、しばらくする内には牛車（ぎっしゃ）の数（かず）も、所によっては車の軸が互に押し合いへし合うほど、多くなって参りました。それを見た恵印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が参るでございましょう。が、ここに妙な事が起ったと申しますのは、どう云うものか、恵印の心にもほんとうに竜が昇りそうな――それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなさそうな気がし出した事でございます。恵印は元よりあの高札（こうさつ）を打った当人でございますから、そんな

莫迦（ばか）げた気のすることはありそうもないものでございますが、目の下で寄せつ返しつしている烏帽子（えぼし）の波を見て居りますと、どうもそんな大変が起りそうな気が致してなりません。これは見物の人数の心もちがいつとなく鼻蔵（はなくら）にも乗り移ったのでございましょうか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騒ぎが始まったと思うと、何となく気が咎（とが）めるので、知らず知らずほんとうに竜が昇ってくれれば好（い）いと念じ出したのでございましょうか。その辺の事情はともかくも、あの高札の文句を書いたものは自分だと重々（じゅうじゅう）承知しながら、それでも恵印は次第次第に情けない気もちが

薄くなって、自分も叔母の尼と同じように飽かず池の面（おもて）を眺め始めました。また成程（なるほど）そう云う気が起りでも致しませんでしたら、昇る気づかいのない竜を待って、いかに不承不承（ふしょうぶしょう）とは申すものの、南大門（なんだいもん）の下に小一日（こいちにち）も立って居る訳には参りますまい。

「けれども猿沢の池は前の通り、漣（さざなみ）も立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございます。空もやはりほがらかに晴れ渡って、拳（こぶし）ほどの雲の影さえ漂って居る容子（ようす）はございません。が、見物は相不変（あいかわらず）、日傘の陰にも、平張（ひらばり）の下にも、あるいはまた桟敷（さじき）の欄干の後（うしろ）にも、簇々（ぞくぞく）と重なり重なって、朝から午（ひる）へ、午から

夕（ゆうべ）へ日影が移るのも忘れたように、竜王が姿を現すのを今か今かと待って居りました。

「すると恵印（えいん）がそこへ来てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のような一すじの雲が中空（なかぞら）にたなびいたと思いますと、見る間にそれが大きくなって、今までのどかに晴れていた空が、俄（にわか）にうす暗く変りました。その途端（とたん）に一陣の風がさっと、猿沢の池に落ちて、鏡のように見えた水の面に無数の波を描（えが）きましたが、さすがに覚悟はしていながら慌てまどった見物が、あれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまっ白にどっと雨が降り出したではございませんか。のみな

らず神鳴（かみなり）も急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稲妻（いなずま）が梭（おさ）のように飛びちがうのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引っ裂いて、余る勢いに池の水を柱のごとく捲き起したようでございましたが、恵印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色（こんじき）の爪を閃（ひらめ）かせて一文字に空へ昇って行く十丈あまりの黒竜が、朦朧（もうろう）として映りました。が、それは瞬（また）く暇で、後（あと）はただ風雨の中に、池をめぐった桜の花がまっ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます――度を失った見物が右往左往に逃げ惑って、池にも劣らない人波を稲妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申

し上るまでもございますまい。
「さてその内に豪雨（ごうう）もやんで、青空が雲間（くもま）に見え出しますと、恵印は鼻の大きいのも忘れたような顔色で、きょろきょろあたりを見廻しました。一体今見た竜の姿は眼のせいではなかったろうか――そう思うと、自分が高札を打った当人だけに、どうも竜の天上するなどと申す事は、なさそうな気も致して参ります。と申して、見た事は確かに見たのでございますから、考えれば考えるほど益（ますます）　審（ふしん）でたまりません。そこで側（かたわら）の柱の下に死んだようになって坐っていた叔母の尼を抱（だ）き起しますと、妙にてれた容子（ようす）も隠しきれないで、

『竜を御覧じられたかな。』と臆病らしく尋ねました。すると叔母は大息をついて、しばらくは口もきけないのか、ただ何度となく恐ろしそうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震え声で、『見たともの、見たともの、金色の爪ばかり閃いた、一面にまっ黒な竜神じゃろが。』と答えるのでございます。して見ますと竜を見たのは、何も鼻蔵人の得業恵印の眼のせいばかりではなかったのでございましょう。いや、後で世間の評判を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女は、大抵皆雲の中に黒竜の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。

「その後恵印は何かの拍子（ひょうし）に、実はあの建札は自分の悪戯（いたずら）だったと申す事を白状してしまいましたが、恵門を始め仲間の法師は一人もその白状をほんとうとは思わなかったそうでございます。これで一体あの建札の悪戯は図星（ずぼし）に中（あた）ったのでございましょうか。それとも的（まと）を外れたのでございましょうか。鼻蔵（はなくら）の、鼻蔵人（はなくろうど）の、大鼻の蔵人得業（くろうどとくごう）の恵印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい…………」

三

宇治大納言隆国(うじだいなごんたかくに)「なるほどこれは面妖(めんよう)な話じゃ。昔はあの猿沢池(さるさわのいけ)にも、竜が棲(す)んで居ったと見えるな。何、昔もいたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居ったに相違あるまい。昔は天(あめ)が下の人間も皆心(しん)から水底(みなそこ)には竜が住むと思うて居った。さすれば竜もおのずから天地(あめつち)の間(あいだ)に飛行(ひぎょう)して、神のごとく折々は不思議な姿を現した筈じゃ。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚(あんぎゃ)の法師の番じゃな。

「何、その方の物語は、池(いけ)の尾(お)の禅智内供(ぜんちないぐ)とか申す鼻

の長い法師の事じゃ？　これはまた鼻蔵の後だけに、一段と面白かろう。では早速話してくれい。――」

（大正八年四月）

底本：「芥川龍之介全集３」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
　　１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり

１９９８年12月８日公開
２００４年３月13日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。